サイのクリスマス

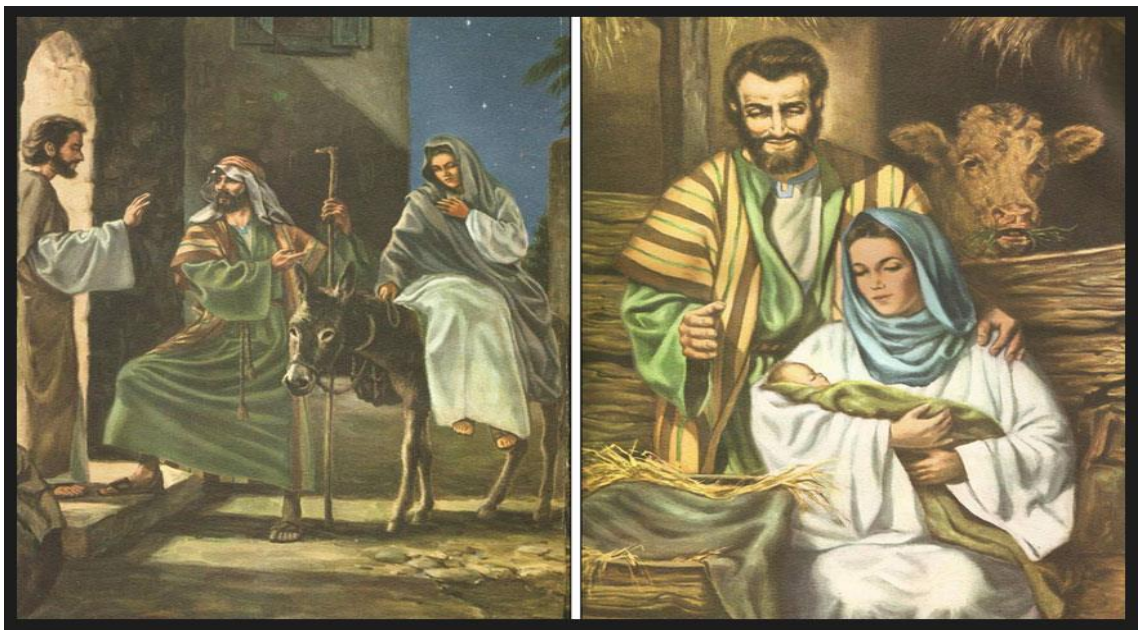
今、クリスマスのシーズンが再びやってきました。クリスマスパーティーやクリスマスグッズ、美しい装飾、クリスマスプレゼントやクリスマスカードのお祝いやお祭りと共に。

しかし親愛なる皆さん、クリスマスにはさらにこれ以上の意味があります。実際、これらのことはどれも本当にクリスマスを祝っているとは言えません。では、クリスマスの本当の意味とは何でしょうか？　スワミはこのことを説明してくださっています。スワミはキリストの誕生と教えの物語の中で、私たちに数多くの啓示と洞察を与えてくださいました。

イエスが生まれる直前、ローマ皇帝のシーザー・アウグストゥスは、すべての民は課税される先祖の町に、登録のため出頭しなければならないという法令を出しました。

そこで、ヨセフとマリア〔イエスの両親〕は、ナザレの町からベツレヘムへと旅立ちました。

マリアは小さなロバに乗り、ヨセフはそのかたわらを歩きました。彼らがベツレヘムに到着したのは、その長い旅の2日目の夜遅くでした。



町中のすべての宿はいっぱいで、泊まる場所を見つけることはできませんでした。とうとう、マリアの青白く疲れた顔を見たある宿屋の主人が彼らを哀れみ、宿の裏にある馬小屋に泊まるように勧めてくれました。マリアとヨセフは喜んで、その質素で小さな休息所で動物たちと共に過ごしました。

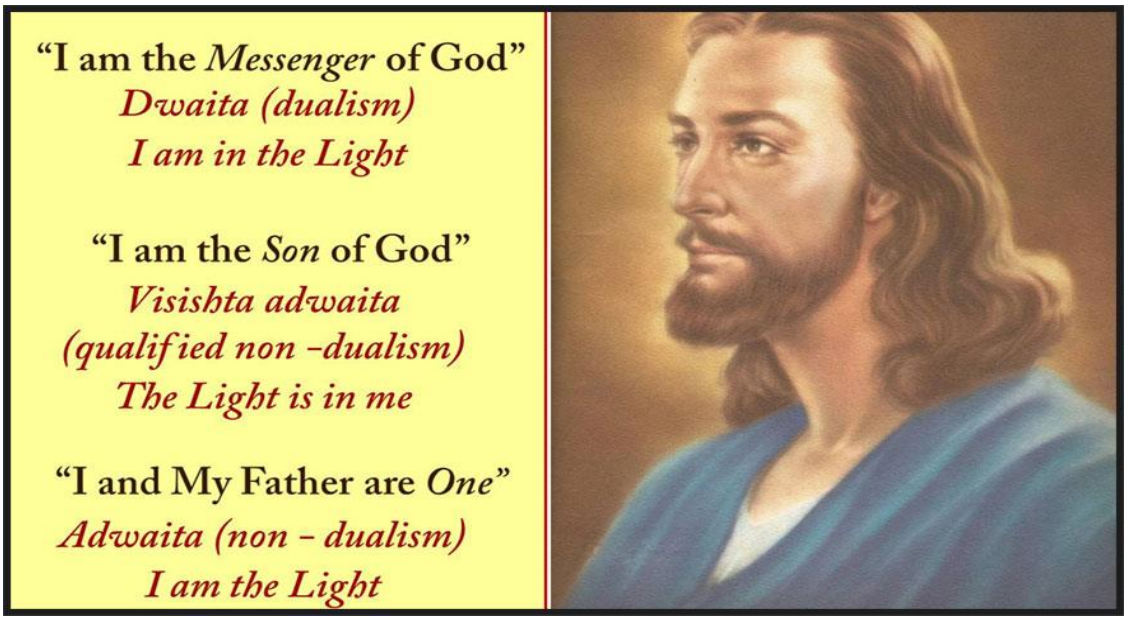
その夜、イエスが誕生しました。マリアは小さな幼子(おさなご)をそっと布の帯でくるみ、柔らかい甘い香りのする干し草の上に置かれた飼い葉桶(かいばおけ)の中に寝かせました。イエスは謙虚さの権化でした。そして、馬小屋での誕生は、おそらくイエスの人生を特徴づける大いなる謙虚さのしるしだったのでしょう。

ベツレヘムの郊外の丘では、小さな焚火に身を寄せ合う羊飼いたちが、夜分に羊の群れを見守っていました。突然、彼らの目の前に1人の天使〔御使い〕が現れて、主の栄光が辺り一帯にきらめき輝きました。最初のうち、羊飼いたちは恐怖でお互い身を縮めていましたが、天使はこう言いました。「恐れることはありません。私はあなた方に、すべての民に与えられる大きな喜びとなる福音〔良い報せ〕を持って来たのです。今宵、全人類のために救い主がお生まれになりました。そのお方こそは主なるキリストです。あなた方が彼を見つけるしるしを教えましょう。主は、布の帯にくるまれて飼い葉桶の中に横たわっておられます」。 すると突然、大勢の天使たちが歌を歌いながらその場に現れました。「いと高き所では、神に栄光があるように、地の上では御心にかなう人々に平和があるように」。〔『ルカによる福音書』第2章14節〕

羊飼いたちは驚きに満ちて、お互いせきたてられるように、「急いでベツレヘムに行って、この起こった出来事を見てこようではないか」と語り合いました。彼らは（幼子を）捜し求め、とある宿屋の裏手にある馬小屋でマリアとヨセフを見つけました。そして、まさに知らされた通り、そこには柔らかな木綿の布にくるまれて飼い葉桶の中で眠っている幼子がいました。羊飼いたちは、非常に単純で素朴な人たちでしたが、小さな幼子を見つめた時、本能的にその幼子には何か神秘的なものがあることがわかりました。

スワミがおっしゃるには、その幼子を見て１人の羊飼いは、「この幼子は神を愛している」と言い、別の羊飼いは、「いや兄弟、神が彼を愛されているのだ」と言い、3番目の羊飼いはよくよく考えて、「この幼子は神ご自身である」と言ったのだそうです。

羊飼いたちのこれらの発言は、イエスが人生の3つの異なる時期に宣した3つの声明と一致しています。初めに、イエスは自分自身のことを神の使い〔メッセンジャー〕と呼びました。それから、「私は神の子である」と言いました。そして最後にこう宣言しました。「私と父〔神〕とは一つである」。〔『ヨハネによる福音書』第10章30節〕 スワミは、神を愛することによってあなたは神の使いになり、神に愛されることによって神の子となる、と説かれています。そして、その両者が一致すれば、「私と父とは一つである」という段階が実現します。人間は皆、神の使いです。人に神の子と呼ばれる権利を与えるものは何でしょうか？ 神の子と呼ばれるためには、神と同じ資質を持つ必要があるのではないでしょうか？ 心の中にほんの少しでも自分勝手な気持ちがあってはいけません。私たちは、純粋で無私の愛に満ちていなければなりません。



「私は神の使い（メッセンジャー）です」
ドワイタ（二元論）
私は光の中にいる

「私は神の子です」
ヴィシシュタードワイタ（条件付不二一元論）
光は私の中にある

「私と父（神）とは一つです」
アドワイタ（不二一元論）
私は光である

イエスの3つの声明は、サナータナダルマ（古来の永遠の法）に記されている霊性修行の3つの段階にも相当します。それは、ドワイタ、ヴィシシュタードワイタ、アドワイタです。主なるラーマの偉大な帰依者であったハヌマーンが、この3段階を次のように表現しました。

「おお、神よ、私が自分自身のことをこの肉体とみなす時、私はあなたの僕〔召使い〕です。私が自分自身のことをこの心とみなす時、私はあなたの帰依者です。しかし、私が自分自身をアートマ（神我）とみなす時、あなたと私は一つです」。

イスラム教でも次のような言葉で、この3つの段階について説いています。

「私は光の中にいる」、「光は私の中にある」、そして「私は光である」と。

さてここで、3人の王というよりむしろ東方の“賢者”と呼ぶべき人々がやって来ました。彼らは、実際には占星術師たちでした。歴史家の中には、彼らはペルシャから来たゾロアスター教徒だったと言う人々もいます。賢者たちは、今まで何もなかった空に（突如として）輝かしい光の玉を見ました。「この明るい新しい星は何だろう？」と彼らは不思議に思いました。彼らはラクダに乗って、ユダヤの地〔古代パレスチナ南部の地名〕に到着するまで、ずっとその新しい星に導かれるままやって来たのでした。ここで、彼らは尋ねました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにいらっしゃいますか？　私たちはその方に敬意を表するため、東方からその方の星に導かれてやって来ました」。そうやって、ベツレヘムの町に到着するまで彼らは旅を続けてきたのでした。

賢者たちはイエスのことを“イスラエルの王”と呼びました。ですが、イエスは通常の意味での王ではありませんでした。イエスの王国は、父なる神の王国―アートマ〔真我〕の王国だったのです。

この巨大な星の光は、イエスが生まれた馬小屋の真上に現れました。それは、実際には星ではなく、夜空にきらめく巨大な光のオーラだった、とスワミはおっしゃっていました。このことは、邪悪と無知の暗闇に打ち勝つお方がお生まれになり、人々の心に愛と英知の光を広げようとされていることを意味していました。こういったしるしは、預言者やアヴァター〔神の化身〕が肉体をまとう時には自然なことです。なぜならそれは、「タマソー マージョーティル ガマヤー（暗闇から光明へと）」という人々の祈りに神がお答えになった結果、現れるものだからです。

賢者たちは、自分たちの持ち寄った贈り物――金貨の入った小さな宝石箱、芳香のするお香の入った彫刻の施された箱、そして体を清める没薬の油が入った小さな壺――を幼子に捧げ、敬意を表しました。

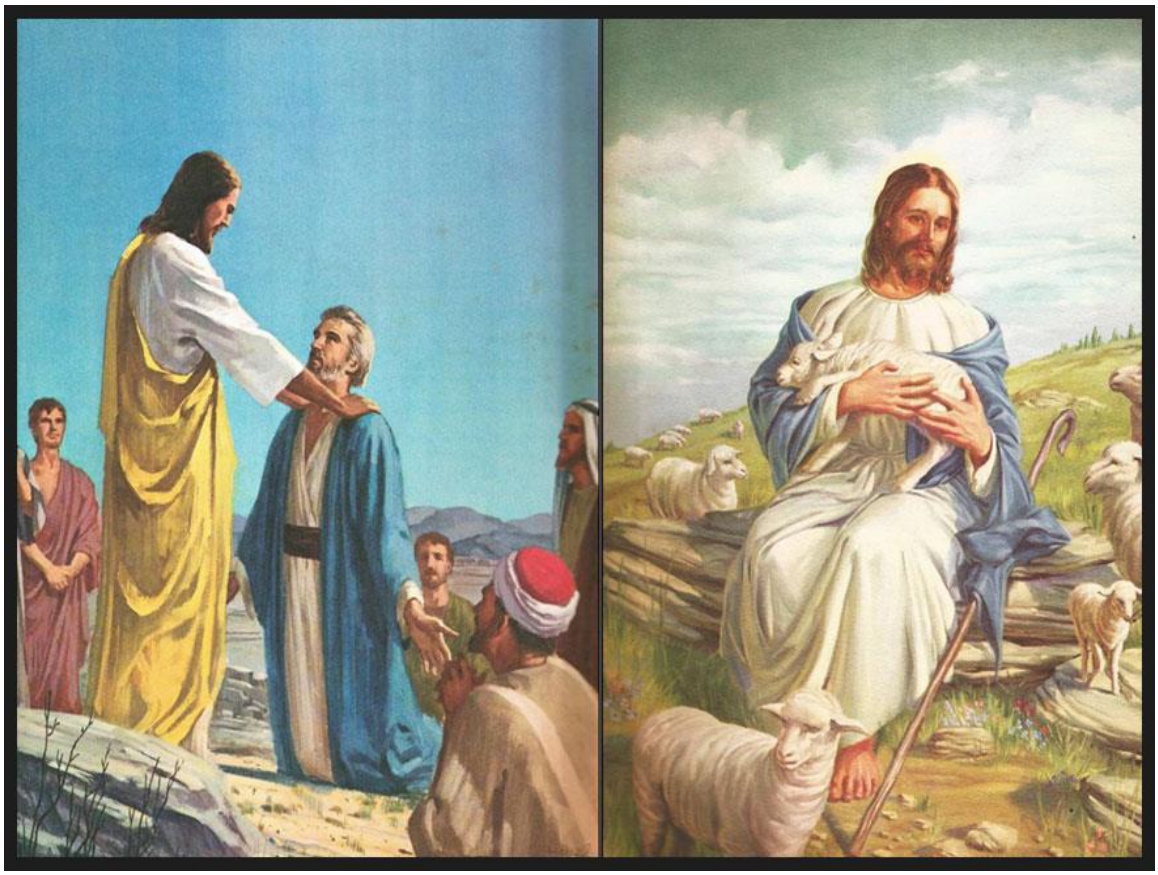
金（きん）は純粋性と尊さの象徴です。スワミは学生や帰依者たちのことをよく「バンガール」と呼ばれたものでした。それは「金」という意味です。ある時、スワミは学生たちに、「あなたたちは14カラットの金ですが、24 カラットの金にならなければいけません！」とおっしゃいました。お香は善良さと愛の芳香を広げることの象徴です。没薬の油は苦いことで知られていますが、同時に良い香りがすることでも知られています。イエスは苦痛と喜びの両

方を超越しました。「愛する息子よ、すべては一つ。万人に等しく接しなさい」という父なる神の言葉に従ったからです。イエスは世界に喜びをもたらしただけではなく、喜び（joy）への道も示しました。「J」は人が一番大切にしなければいけないイエス（Jesus）、すなわち神を象徴しています。「O」はその次に来なければいけない他の人々（others） を表し、「Y」は最後に来るべき自分自身（yourself）を表しています。これが喜びへと至る道です!

　イエスの母のマリアは心を表し、イエスは心に湧き上がる喜びと至福を表しています。そのため、マリアは膝の上に幼子イエスを乗せた姿で描かれているのです。

というわけで、クリスマスを祝う本当の意味とは、私たちの心の中でキリストの誕生を祝うことです。すなわち、無私の愛と平和と喜びの誕生です。イエスは慈悲と正義と平和のためにすべてを犠牲にしました。ですからイエスの誕生日は、イエスがとても大切にしていた理想の少なくとも一つでも実践することによって祝わなくてはなりません。すべての預言者やアヴァターたちがそうであったように、イエスは、神の王国が自分自身の内にあることを人々に気づかせるために降臨しました。

イエスは至高の原理である神と融合する前に、「私を遣わされたお方が再び戻って来られるであろう」と信奉者たちに語りました。そして、一匹の子羊を指差しました。



子羊はただ愛の象徴であり、それはBA_BA（バーバー）という音〔羊の鳴き声〕を表しています。この出来事をお話しになっていた時、スワミは微笑んでおっしゃいました。

「そのバーバーはこのババ（BABA）のことです」。

さらに、イエスは（次のことを）明らかにしました。

「主の御名は『真理』と呼ばれるであろう。彼は血染めの衣〔赤いローブ〕を身にまとうであろう。彼は小柄で、多くの王冠（のような髪）をしているだろう」。

〔訳注：『ヨハネの黙示録』第9章11～13節参照〕

父（なる神）がお住まいのプラシャーンティ・ニラヤムで祝われるクリスマスには独特なものがあります。あらゆる国からきたあらゆる宗教を信じる人々が、神聖な一体性の精神でスワミの蓮華の御足のもとに集まってくる様子が見られるのは、ここだけだからです。

サイのクリスマスを夢見ている
ちょうど昔、私たちが知っていたようなクリスマス
銀色の扉が開かれて
スワミの神聖なダルシャンが流れ出し
地上のすべての世界を輝かせていた

サイのクリスマスを夢見ている
すべての人のハートに愛が生まれ
毎日が至福に満ちた明るいものになるように
そして私たちの内におわすサイが
ハートを光で満たしてくださるように

（この記事は、ムンバイ・フォートのバル・ヴィカスの子供たちによる『サイのクリスマス』の発表をもとに書かれたものです。画像は Ideal Publications, USA, Christmas Issues 1970-1980 から許非商業的再利用のための許可を得て転載されています）　ラジオ・サイ・チーム

※　原文中の子供たちによる讃美歌の動画は、下記の英語版をクリックしてご覧ください。
http://media.radiosai.org/journals/vol 14/01DEC16/A-Sai-Christmas.htm